

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 年～2011 年

課題番号：20520614

研究課題名（和文）近世朝鮮におけるイエズス会宣教師作製世界図の伝来とその受容に関する研究

研究課題名（英文）Research on the Global Map which the Jesuit missionary produced was introduced in Modern Korea.

研究代表者

鈴木 信昭（NOBUAKI SUZUKI）

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：50206512

研究成果の概要（和文）：16 世紀末以降の中国において、イエズス会宣教師等が作製した世界図は、少なからず存在する。それら世界図の中で、最も早く朝鮮に伝えられたのは、1603 年の『坤輿万国全図』であった。その後、1620 年には、黄中允によって『兩儀玄覽図』が朝鮮にもたらされた。また、これまでの研究では、柳夢寅（1559～1623）が北京で世界図を購入したとされてきたが、本研究によってそれは事実ではないことが明らかとなり、さらには、1629 年に、崔有海が中国の登州で西洋の地理情報を伝聞したことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In China on and after the end of the 16<sup>th</sup> century, the global map which the Jesuit missionary etc. produced is existing not a little. In these global map, “坤輿万国全図” in 1603 was most introduced into Korea early. Then, 黄中允 transmitted “兩儀玄覽図” to Korea in 1620. Moreover, it has been said that 柳夢寅 purchased the global map in Beijing. However, it became clear by this research that it is not a fact. Furthermore, it became clear that 崔有海 heard geographic information from the Chinese Christian in Chinese 登州 in 1629.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1, 100, 000	330, 000	1, 430, 000
2009 年度	700, 000	210, 000	910, 000
2010 年度	700, 000	210, 000	910, 000
2011 年度	600, 000	180, 000	780, 000
年度			
総計	3, 100, 000	930, 000	4, 030, 000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：東アジア史

## 1. 研究開始当初の背景

(1)、最近、大韓民国で「耶蘇会士利瑪竇万国全図」と題する大型の世界図が個人宅から発見された。本世界図は、「利瑪竇」と明記されてはいるものの、マテオ・リッチが作製したのではなく、1623 年にジュリオ・アレニが杭州で刊行した『職方外紀』に所載する「万国全図」、ないしはその模写図を底本

に描かれたものである。大韓民国ではこれまでに、『職方外紀』所載の「万国全図」を模写したと考えられる大型の世界図として、『天下都地図』（ソウル大学校奎章閣所蔵）と『万国全図』（ソウル市内個人蔵）の二点が知られていたが、今回の発見によって、都合三点の「万国全図」系統模写図の存在が確認されるに至ったのである。

こうした新資料の出現によって、朝鮮で、いつ頃、誰がどのような理由から模写図を作製するに至ったのか、早急に研究する必要性がでてきた。

(2)、これまで、イエズス会士作製世界図の朝鮮への伝来とその受容に関する研究は、1603年にマテオ・リッチの『坤輿万国全図』が将来されたことを嚆矢とし、また、同世界図の将来を『芝峯類説』に明記した李 晔光 (1563～1624) によって既に受容されたとしてきた。しかし、本研究の研究によって、李 晔光が『坤輿万国全図』の世界地理や世界観を受容した事実はないことが明らかとなった。そのため、朝鮮でいつ頃、どのような人物がイエズス会士作製世界図を朝鮮に持ち込み、またそれを受容するに至ったのか、再検討する必要性があわわれた。

(3)、これまで、イエズス会士作製世界図を含む漢訳西学書がいつ頃朝鮮に伝来したのかという問題については、主に『朝鮮王朝実録』や『承政院日記』などの官撰史料に基づいて研究がおこなわれてきた。しかし、近年、大韓民国では全国に散在していた朝鮮王朝時代士大夫の文集が整理され、『韓国歴代文集叢書』と題して三千冊が刊行された。また、『韓国文集叢刊』と題して約四百冊余りが刊行中である。さらには、朝鮮から中国に出かけた使節の旅行日記が『燕行録全集』(百冊)として影印刊行された。こうした新たな史料は、これまでの研究ではほとんど利用されてこなかったものである。こうした史料を利用することにより、これまでの研究では明らかにできなかった点が解明されると考えられる。以上のような研究背景のもとで、研究課題を解明しようと考えるに至った。

## 2. 研究の目的

(1)、朝鮮に、いつ頃、誰によってイエズス会士作製の世界図や地理書を含む漢訳西学書が伝えられたのか、個別具体的に明らかにすることが本研究の最も大きな目的である。

(2)、朝鮮士大夫の中で、17世紀初頭以降、世界図や西洋事情、西学情報に言及した者がいたのかどうか、史料から抽出して、いたのであれば、彼がどのような世界観や地理観を持っていたのか明らかにすることが第二の目的となる。

(3)、大韓民国に現存するイエズス会士作製世界図とその模写図、特に模写図については体系的な研究は勿論のこと、その全体的所蔵調査もおこなわれていないため、韓国に現存する模写図を調査するとともに、各図に対して

書誌学的分析を加え、さらには、模写図作製の意図やその作製年代などを明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1)、17世紀以降の朝鮮において、イエズス会士作製世界図を含む漢訳西学書が、いつ頃伝えられ、誰によって受容されていたのかという問題を明らかにするために、これまでの研究では利用されることの少なかった個人の文集(主に『韓国歴代文集叢書』や『韓国文集叢刊』に収録のもの)を精読調査し、個別具体的に事例を明らかにしていく。そのため、本研究の全期間を通してそれら文集史料の閲覧・調査に費やした。

(2)、現在購入できる史料以外に、日本や大韓民国では多くの漢訳西学書関連の史料を所蔵している。そのため、本研究では、全期間を通じて、日本国内の図書館や史料館、大韓民国の同様な史料館で史料調査をおこなった。

## 4. 研究成果

(1)、17世紀初頭以降に朝鮮に伝えられたイエズス会士作製世界図を含む漢訳西学書は、どのようなものであったのかという問題を検討する前に、16世紀末までの朝鮮士大夫の世界観や地理観がどのようなものであったのか、当時を代表する知識人である李 晔光を例にして検討した。その結果、以下のような成果を得た。

①、李 晔光(1563-1626)が生きた時代は、文禄慶長の役という未曾有の国難が全土を襲ったときであったが、そうした中で、彼は種々の体験から新たな世界地理知識を得ることとなった。

明国を中心とする大陸世界からは、『広輿図』のような中国の周辺地域までも図示する図帖や地理志・類書が朝鮮に伝えられた。李 晔光は、三回にわたる北京使行で地理書や類書を購入し、なかでも『吾学編』と『三才図会』によって、世界の形状がどのようなになっているのか、地上世界にはどのような国々や人々が住んでいるのか知るようになった。

②、また李 晔光は、1603年には、北京から帰国した使臣らが持参したマテオ・リッチ作製の『坤輿万国全図』をも閲覧する機会に恵まれた『坤輿万国全図』は、世界地理に関しては勿論のこと、地球球体説までも解説する当時としては最新の世界図であった。しかし、李 晔光は、『坤輿万国全図』は西域が詳しく書かれていると寸評するだけで、その内容には信頼を寄せてはいなかった。

③、さらに李 晔光は、東シナ海・南シナ海域

を通じて新たな世界地理情報を入手した。東シナ海からは、日本人との接触の中で、「南蛮国」と「永結利」国の存在を知ることとなったが、それらの国が地上のどの辺に位置する国であるのか確認することはできず、「永結利」国に至っては、中国の『元史』を典拠にして、中国の北西地域にある「吉利吉思」、あるいは「骨利幹国」であろうと結論づけてしまった。

④、また南シナ海域からは、北京で出会った暹羅国の使臣が持参した地図によって「仏浪機国」の存在を知り、日本と安南を船で往復した朝鮮人の趙完璧からは、実際の安南の状況を聞く機会を得た。

以上のように、李暉光は、種々の情報に基づいて、当時の世界地理や情勢を見聞する機会に恵まれたが、イエズス会士のリッチが作製した『坤輿万国全図』を信用せず、彼の世界観形成の中で基本となっていたものは、『三才図会』に所載する「西南夷総図」、「東南海夷総図」のような「世界図」であり、『吾学編』で列挙していた中国人が当時理解していた国々であった。

しかし、李暉光のように多くの情報に接する機会があった者は少なかったろう。彼を例にして、朝鮮知識人全てに普遍化するわけにはいかないであろう。

(2)、朝鮮光海君時代(1609-1623)にどのような漢訳西学書が朝鮮に伝えられたのか、この時期に漢訳西学書を閲覧したとされる柳夢寅(1559-1623)と許筠(1569-1618)を例にして検討を加えた。

これまでの研究では、柳夢寅が著述したとされる『於于野譚』をもとにして、柳夢寅がマテオ・リッチ著述の『天主実義』を閲覧して、同書の異端性を指摘したり、許筠がリッチの世界図とともに漢訳西学書『偈十二章』を朝鮮にもたらしたとしてきた。しかし、検討の結果、以下のような成果を見た。

①、これまでの『於于野譚』に関する研究は、1964年に印刷刊行された現行本に基づいておこなわれてきた。しかし、日本や大韓民国に現存する『於于野譚』の抄本を分析調査した結果、現行本を史料として利用するのは危険であることが判明した。

本来、柳夢寅が書き残した『於于野譚』は、版本として印刷されたことはなく、彼が死去した後に抄本として発見され、その後、幾多の人によって書き留められてきたものである。そのため、各抄本内では内容が同じものは一つとしてないのである。こうした抄本を一同に集め、そして編纂印刷されたものが現行本なのである。こうした事情から、現行本の内容が、全て柳夢寅が書き残したものでは

ないことが明らかになった。

②、以上の検討から、柳夢寅が『天主実義』を批判をしたり、許筠が天主教を信仰していたことを明記する「西教」条は、柳夢寅が直接記述したのではなく、彼の死後、かなりの年月が過ぎた後に、誰かによって書き加えられたものであることが判明した。

③、現存する『於于野譚』の諸異本を考察した結果、柳夢寅が『天主実義』を朝鮮に将来した可能性は残るものの、同書の内容を儒教的観点から批判したとは考えられないことも明らかとなった。また、許筠についても、リッチの世界図を朝鮮に持ち帰った可能性は残るが、それ以外の漢訳西学書とは関わりがないことも明らかとなった。許筠が将来したとする『偈十二章』については、同書は在華イエズス会士が編述した漢訳西学書ではなく、むしろ、日本キリシタンとの関連の中で再考すべきではないかという点も指摘した。

以上のような成果から、光海君時代に朝鮮に将来した漢訳西学書は、1620年に黄中允がリッチの『両儀玄覧図』を持ち帰った以外に新たに判明した事例はなかった。

(3)、朝鮮仁祖時代(1623-49)には、どのような漢訳西学書が朝鮮に伝えられたのであろうか。これまでの研究では、1631年に鄭斗源が北京からの帰路に山東半島の登州で、イエズス会士ロドリゲスから世界図を含む漢訳西学書や西洋の文物を贈与されたこと、1644年に昭顯世子がアダム・シャルルから北京で漢訳西学書を寄贈された事例が知られるだけであった。しかし、『韓国文集叢刊』、『韓国歴代文集叢書』などの個人文集を調査分析した結果、次のような成果を得た。

①、鄭斗源がロドリゲスから西洋の文物や漢訳西学書を寄贈された事実については、朝鮮西学史上の特筆すべき事件として、かなり早くから知られていた。しかし、北京から遠く離れた登州で、鄭斗源がなぜ欧人宣教師からそれらのものを寄贈されなければならなかったのか、その理由については、全く明らかにされてこなかったのである。

しかし、同時代の崔有海(1588-1642)が著述した『黙守堂先生文集東槎録』を調査した結果、次のようなことが明らかとなった。崔有海は、1629年末から翌年春までに朝鮮政府の使節として、山東半島の登州に派遣され、そこに滞在していた。そして、彼はたまたま登州で「都司」として活躍していた張燾と歓談する機会を得て、文章のやりとりをしていた。ところが、張燾は、当時イエズス会宣教師から洗礼を受けた天主教信徒であったた

めに、崔有海は彼から、北京で欧人宣教師等が活躍している様子や西洋の事情、西洋の天文学・暦学などの情報を得ていたことが明らかとなった。さらには、張燾から『天学初函』を進呈しようとの意見まで交わしていたのである。実際のところ、崔有海が帰国するときに、『天学初函』を持ち帰ることはなかったようであるが、鄭斗源が登州に滞在する一年あまり前に、崔有海が張燾と出会っていたことが明らかとなった。

②、崔有海が帰国した後に、登州には、イエズス会宣教師のロドリゲス、中国人の天主教信徒の孫元化、王徴などが、対後金対策として赴任し、張燾と行動をとるにしているが、張燾が崔有海と歓談した際に、崔有海が西洋の学問に関心を持っていたことなどが遠因となって、たまたま登州に入城した鄭斗源の客舎をロドリゲスが訪れ、鄭斗源に漢訳西学書や西洋の文物を送ったのではないかと推測した。

③、仁祖時代に漢訳西学書が伝えられた事例としては、主に仁祖時代に政府の高官を歴任していた金世濂(1593-1646)の文集に注目すべき文言が掲載されていた。それは、1636年に金世濂が通信使の副使として日本に赴いた際に、下関から瀬戸内海に船に入ったとき、日本列島の地形を見ると、これまで朝鮮国内で流布していた地図は、その実態を捉えていないが、マテオ・リッチが作製した世界図には日本列島の形状が一番よくとらえられていると言及する部分がある。金世濂は、1636年までに明国に使節の一員として赴いた事実はないため、彼が見たリッチの世界図は朝鮮国内で誰かが所持していたものである。その人物が誰なのかは、今後の研究で明らかにしていきたいが、『韓国文集叢刊』や『韓国歴代文集叢書』のような個人文集を網羅的に調査することで、こうした事例は今後とも明らかになっていくものと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①、鈴木信昭「朝鮮仁祖八年間安官崔有海の伝聞した西学情報」、『朝鮮学報』、査読有、221 輯、2011 年、83-115 頁
- ②、鈴木信昭「朝鮮光海君時代の儒学者が見た漢訳西学書：柳夢寅『於于野譚』異本考」、『明清史研究』、査読無、5 輯、2009 年、55-97 頁

[図書] (計1件)

- ①、共著、桂書房、濱下武志編『海域世界のネットワークと重層性』、2008 年、総 269 頁。

鈴木信昭「17 世紀初頭朝鮮に伝えられた世界地理情報：海域世界・大陸世界からの情報」(68-105 頁)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

鈴木 信昭 (NOBUAKI SUZUKI)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：50206512

